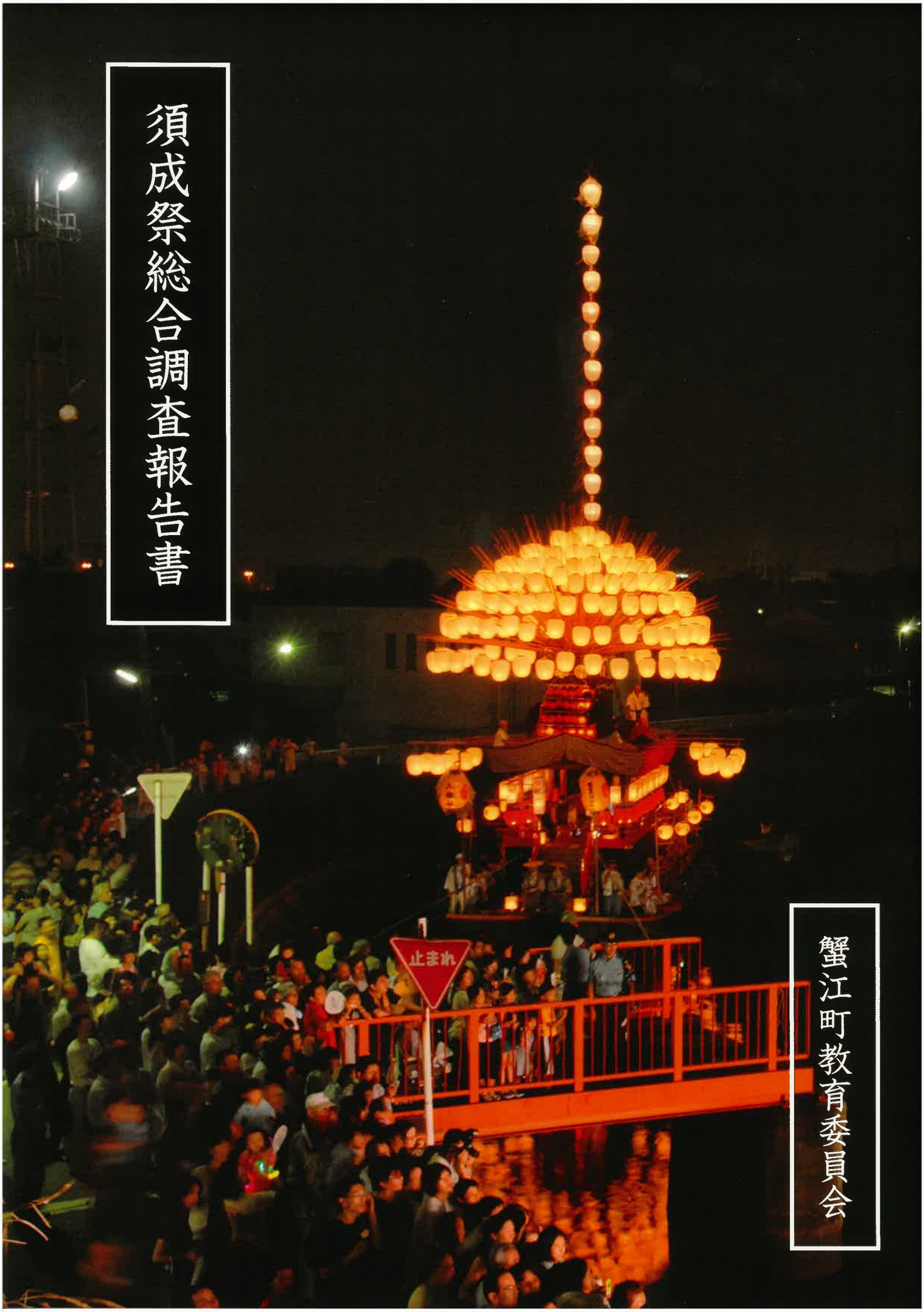
須成祭総合調査報告書



蟹江町教育委員会

目次

写真図版 …… 1
刊行によせて …… 蟹江町長　横江淳一 31
刊行によせて …… 蟹江町教育委員会教育長　石垣武雄 33
目次 …… 35
例言 …… 38
序章　須成の神々と仏―須成神社と龍照院― …… 43
（一）富吉荘と須成 44　（二）常楽時と龍照院 45
（三）須成神社 51　（四）須成地域の社と神 56
（五）結びにかえて 58
第一章　須成と須成祭の歴史 …… 59
第一節　須成の歴史 …… 60
第二節　冨吉建速神社・八剱社 …… 67
第三節　須成祭の歴史 …… 72
第二章　須成の生業と年中行事 …… 81
第一節　須成祭と農事 …… 82
（一）須成の生業 82　（二）須成の農業 83
（三）須成の農事暦と須成祭 86　（四）須成の漁業 98
第二節　須成の歳時と子供行事 …… 102
（一）正月行事 102　（二）春・夏の行事 108
（三）盆行事 110　（四）秋・冬の行事 112
（五）夏の子供行事と農耕儀礼 114
第三章　須成の社会と祭礼組織 …… 119
第一節　社会組織と須成祭 …… 120
（一）生活空間と須成祭 120　（二）社会組織と須成祭 126
（三）年齢集団と親族集団 133　（四）氏子と檀家 136
第二節　須成祭の組織 …… 142
（一）敬神会成立以前の祭礼組織 142
（二）敬神会成立後の祭礼組織 147
（三）現在の祭礼組織 149　（四）須成祭の維持管理 155
第四章　須成祭の行事 …… 159
第一節　須成祭の概要 …… 160
（一）須成祭の概要と日程 160　（二）須成祭の組織 161
第二節　平成十八年の須成祭 …… 165
（一）祭三役・若衆会議 165　（二）榎切り 168
（三）舟竿用の竹伐り 169　（四）稚児定め 170
（五）榎の葉落とし・真菰刈り 172　（六）多度大社祈願 175
（七）宿入り 177　（八）衣装配り 179
（九）花つけ 180　（一〇）稽古始め 181
（一一）ちまき餅の縄綯い・桜花の準備 182

(一三) 葭刈準備 184
(一四) 船がらみ 194
(一五) 柳切り・桜花の花つけ 198
(一六) 葭揃え 200
(一七) 諸册二尊（人形）飾り 203
(一八) 稽古上げ 206
(一九) 祭り直前の準備 207
(二〇) みそぎ 208
(二一) 天王参り 209
(二二) 宵祭 213
(二三) 山起し 217
(二四) 朝祭 219
(二五) 山下し 222
(二六) 神葭流し 223
(二七) 棚上り準備 225
(二八) 棚上り 227
(二九) 多度大社お礼参り 229
(三〇) 御神葭様参り 230
(三一) 中湯立て 231
(三二) 子供獅子と神楽の奉納 231
(三三) 棚下し 233
第三節　須成祭の周辺 …… 234
(一) 砂入れ 234
(二) 体験学習 235
(三) 町民まつりへの参加 235
(四) 神社御用田 236
(五) 注連縄作り 236
(六) 真菰の移植 238
第四節　須成祭行事の変容 …… 239
(一) おこなわれなくなった行事 239
(二) さま変わりした行事 241
第五章　須成祭の囃子 …… 245
第一節　稚児と笛吹 …… 246
第二節　須成祭囃子 …… 248
第三節　須成祭と祭囃子 …… 252
第四節　須成祭とさまざまな音 …… 255
第五節　戦前の囃子 …… 258
(一) 明治時代 258
(二) 大正から昭和十八年まで 259
(三) 神楽寄せ 260
第六節　須成鼓笛保存会の成立 …… 260
第七節　須成祭囃子と津島天王祭の囃子 …… 264
第六章　須成祭の稚児衣装 …… 267
第一節　須成祭の衣装 …… 268
(一) 須成祭の役者の衣装の概要 268
(二) 衣装の現状 271
第二節　稚児衣装 …… 274
(一) 稚児衣装 274
(二) 衣装の柄 274
(三) 稚児衣装の準備と保管 278
第三節　稚児の母親・女性の役割 …… 283
第七章　須成祭の発生と展開 …… 285
第一節　濃尾平野の大山と車楽 …… 286
第二節　須成祭の車楽 …… 295
第三節　記録された須成祭 …… 301
第四節　須成祭と神葭 …… 304
第五節　須成と須成祭を巡る祭礼行事 …… 309
第六節　結びにかえて …… 316

付章　資料編 …… 319
祭船図面 …… 320
諸冊二尊人形図面 …… 330
祭囃子譜面 …… 338
文献資料 …… 348
神社棟札 …… 423
写真資料 …… 432
文化財資料 …… 438
須成祭役割年表 …… 443
参考文献 …… 448

（一）富吉荘と須成

富吉荘と須成

愛知県の西部に位置する海部郡蟹江町は、水郷の町として知られている。ここは東の境を名古屋市と接し、ＪＲ名古屋駅から関西本線で西に十五分弱行くと蟹江駅に到着する。この蟹江駅から北西八百メートル余りの所に本報告書の舞台となる須成がある。須成は蟹江町の北端に位置し、中央を蟹江川が流れ、古くから町場的な性格を備えた農村として発達してきた。

須成には多くの社寺が祀られている。その代表は古い社殿が残る須成神社、正式には富吉建速神社・八剱社である。さらに平安時代末の銘が胎内に記されている十一面観音菩薩立像を本尊とする龍照院も存在する。それぞれ社殿と本尊が重要文化財に指定されているが、これらは土地の人々の篤い信仰によって守り伝えられてきたものである。その他にも東西の神明社・八幡社・市神社、寺院として松秀寺と善敬寺が存在する。本稿では須成に祀られる神と仏、さらに奉納物などから、須成祭を巡る信仰環境を探ることにしたい。

富吉建速神社と八剱社が須成の氏神である。前者が「富吉」と冠されているのは、富吉荘に因む社であることを強調したからである。といっても富吉荘が置かれた時代だけでなく、その範囲も確定はしていない。さらに、両社が富吉荘時代から須成の地に鎮座していたのかも定かではない。

歴史の舞台に富吉荘が登場するのは建久八年（一一九七）からである。それは日置荘との堺相論に係わる文保二年（一三一八）の記録（「関東御教書案」（壬生家文書）[注1]）や、文保三年に富吉荘の宣旨・立券を写すように後宇多院から命じられた文書（「高倉院法華堂禅衆等申状」[注2]）などに、建久八年とあることからである。先の相論記録に、「相論成州又号生出島六丈島」とあるので、川の下流域に形成される州は、その氾濫などによって流路が変わると堺も移動することから、荘堺の問題にまで発展していたのである。この州に係わる内容は須成の地名成立とともに注意しなくてはいけないことである。

富吉荘の範囲だけでなく、その富吉荘があった頃から須成の地名が存在したかも分からない。ただ嘉慶二年（一三八八）頃の「尾張国富吉荘諸郷目録写」[注3]には次の郷名が出ている。それは、荊江郷東西、号東一宮・西一宮、牛踏郷、小家郷、河辺郷、鷲尾郷、今村郷（安国）、蟹江郷（西園寺知行）、大野村、森込

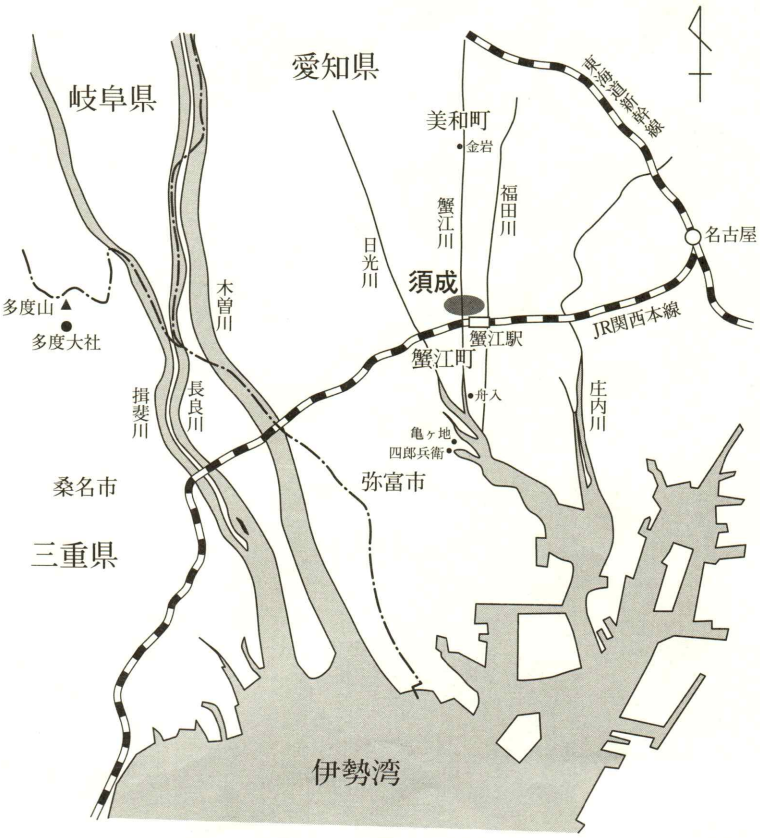


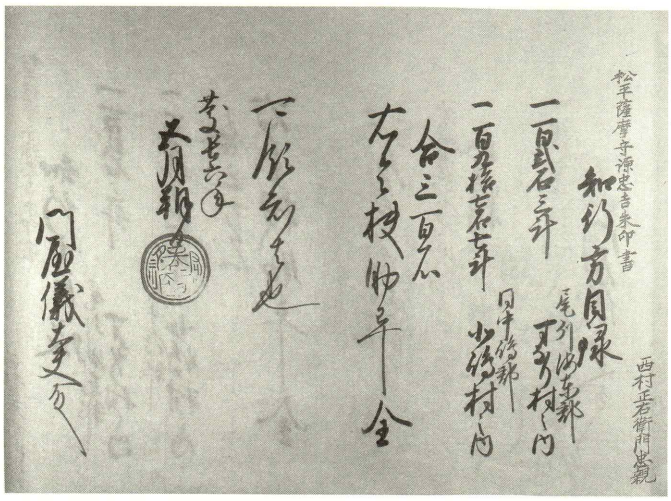
図 序-1　須成の位置

第一節　須成の歴史

須成の初見

須成祭（すなりまつり）の行われる須成という地域はどんな地域だったのか、概観してみたい。

文献上、「須成」という地名の初出は、慶長六年（一六〇一）五月朔日付「松平忠吉知行充行（あてがい）状」（秋田県立公文書館蔵）であろう。



写真Ⅰ-1　松平忠吉知行充行状（秋田県公文書館蔵）

知行方目録

一百弐石三斗　　尾州海東郡　すなり村之内

一百九拾七石七斗　　同中嶋郡　北嶋村之内

合三百石

右令扶助畢、全可領知者也

慶長六年

五月朔日（印）　「松平忠吉」

門屋儀大夫殿

門屋儀大夫については詳らかではないが、秋田藩の家臣の系譜等をまとめた「元禄家伝文書」（秋田県立公文書館蔵）によれば、当初尾張藩主松平忠吉に仕え、如何なる理由からか浪人となり、仙台へ下った人物である。その後秋田へ移り、秋田藩へ召抱えられるようになり、西村と改姓し、以後代々秋田藩士として仕えたという。

冨田荘絵図にみえる須成

近世に入り、須成村が成立したことは相違ない。

けれども、それ以前にもこの地が存在していたことは様々な史料から確認することができる。

例えば、著名な円覚寺蔵の冨田荘絵図をみると、この地の存在が描かれている。ただこの絵図によれば、須成に相当する地域は「蟹江」と記されている。

第一節　須成祭と農事

（一）須成の生業

在郷町としての須成

祭りは、それを支えてきた地域の特質と深く関わって伝承されてきたものであることは間違いがない。須成（すなり）地区は早くから在郷町として栄え、近世には六斎市が開設されるなど、近郊農村の中心として発展してきた。近代になってからも郡道沿いには多くの商店が並んだ他、呉服屋や造酒屋までが揃う町場としての性格を伝えている。別添図Ⅱ―1は、戦後間もなくの須成の町の様子を示したものであるが、実に雑多な商店が軒を連ねており、ここが近在のムラの人々の買い回りの場となっていたことがわかる。

須成が繁華な在郷町であったことは、次のようなことからもうかがえる。飛島村や十四山村（現弥富市）の家では、「嫁に行くなら須成に行け」と言いならわしていた。事実、十四山村辺りから須成に嫁いで来る人は多く、須成祭（すなりまつり）で物入りが多いものの、全般に生活が豊かであると考えられていた。それは関西本線の駅が近く「汽車の見えるところ」という一種のあこがれとともに、百姓が大きくなく、現金収入が多かったことから、嫁としての苦労があまりないと思われていたからでもある。

須成の生活が豊かであったことは、その食生活からもうかがわれる。麦飯を食べるのが普通であった時代に、ある程度の現金収入があった須成の家では普段から白米が食べられていたという。「須成は贅沢で、米も精米屋でついて白米にしていたので、コヌカがたくさん出た」ものだとされる。「小作人でも名古屋に儲けに出ていたので白米を食べることができた。先に米を食べ、残りを売っていた」といい、米を換金して残りを飯米にしていた普通の農村とは全く逆の暮らしぶりの家が多かったのである。

須成祭と農業

このように、海部（あま）郡南部を代表する在郷町として、須成は特殊な地位にあった。しかし、須成を津島祭（つしままつり）を伝えてきた津島のような完全なマチとして捉えることはできない。須成の人たちの暮らしぶりについては、「小作で五反作り、あとは他のことで食べていたところ」と語られる。他のこととは商売でもあり、名古屋を始めとする他の地域に働きに出ることでもあったが、いずれにしても「百姓をしながら勤めに出るところ」であったのであり、人々の生活の基盤に農業があったことは確かである。別添図Ⅱ―2は、昭和初期の須成の土地利用の様子を示したものであるが、ムラの周りは一面の水田であり、一部には島畑が展開していたことがわかる。須成の人たちは商売や勤めで小金を貯めると、それで田を買って農業をしたといい、農業に対する思いは強かった。すべての家が現金収入を得ていたわけではなく、農業にウェイトを置いていた家もかなりあった。須成の周辺地域は尾張平野南部の米どころでもあり、須成祭は、このような農業をベースとする地域に根付いた祭りであったと言ってよい。

伊藤良吉によれば、尾張の天王祭りには疫病除けの夏祭りという都市的な祭礼としての性格の他、田植から穂ばらみに至る間の農耕儀礼的要素が認められるとされる。田植後にムラに迎えられた天王の御札は、七五日間臨時の社殿に

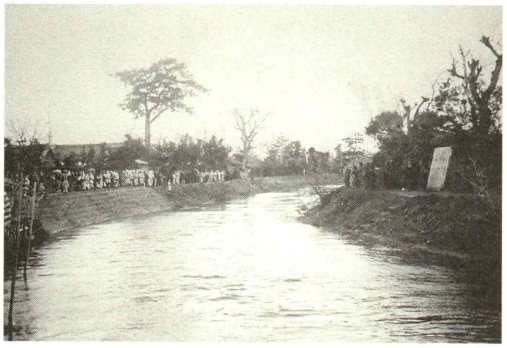
第一節　社会組織と須成祭

（一）生活空間と須成祭

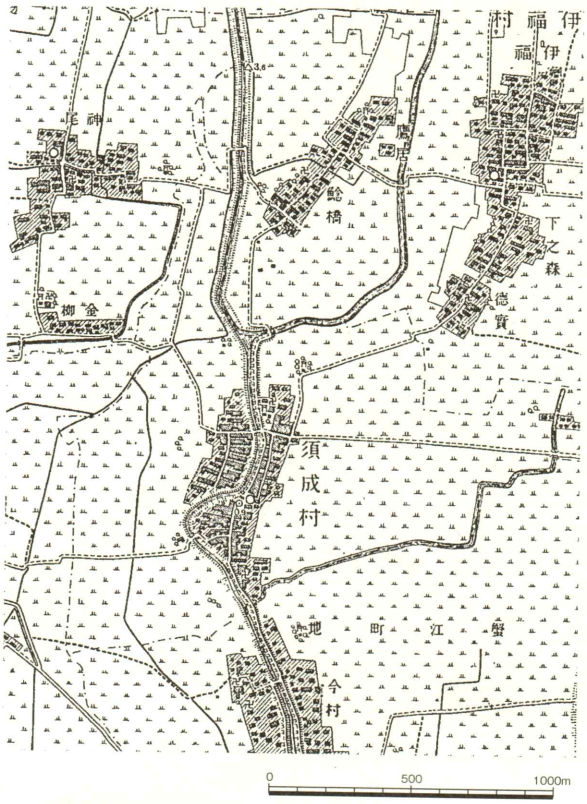
集落景観

須成（すなり）は濃尾平野南部に位置し、須成の集落は家屋敷がひとかたまりとなって寄り添う集村形態を取っており、郷内（集落内）の中央を蟹江川が南流している。主たるなりわいは農業と商業である。この集落形態を弘化四年（一八四七）「海東郡須成村絵図」（徳川林政史研究所所蔵）で見ると、川東では集落北端は「天王」（天王は冨吉建速神社（とみよしたけはやじんじゃ）・八剱社（はっけんしゃ）のことである。本章では二社を指す場合、便宜上須成神社と表記する）南であり、集落南端は善敬寺（ぜんきょうじ）南の用水までであった。集落東端は「神明宮」（東神明社。東お宮ともいう）前の南北道を真っ直ぐ善敬寺までたどった道の西であった。川西では、集落北端は川東集落北端よりはやや北まであり、集落南端は蟹江川が大きく西に迂曲する辺りであった。川西集落北の一角（字井ノ蕪）に「墓焼場」があった。昭和十二年（一九三七）の『土地宝典』にも出ているが、現在はない。明治二十四年（一八九一）の大日本帝国陸地測量部発行二〇〇〇分の一地形図「津島町」を見ると（図Ⅲ―1）、川東の集落は神明社（東お宮）のやや手前まで進出しており、地区の東端に柳瀬（やなぜ）の集落も見られる。川西でも村絵図の頃の集落西端よりさらに西にも集落が進展している。戦後になっても周辺への進展は見られなかったが、昭和四十二年（一九六七）には地区の東南に藤丸団地ができ、四十五年（一九七〇）には門屋敷（もんやしき）の北に名探（めいたん）団地ができた。その頃から須成本郷の周辺にも人家がみられるようになった。

須成の集落・家屋敷の前面（南面）はほぼ南を向いているが、磁石を当ててみると、この方位は実際には南南西を向いている。集落内を通る東西・南北の道も実際にはこの方向と直角方向に走っていた。こうした集落前面が南南西を向く方位は川東も川西も全く変わりない。蛇行する川沿いに三角の土地があち



写真Ⅲ-1　明治33年の蟹江川



図Ⅲ-1　明治24年の須成とその周辺
（明治24年大日本帝国陸地測量部発行　20,000分の1地形図（津島町）より）

第一節　須成祭の概要

（一）須成祭の概要と日程

船祭りと神葭の神事

須成祭は船祭りと神葭の神事からなる。かつては祭りの運営主体であった若衆も祭船に関わる役と、神葭に関わる葭刈役のいずれかに分かれ、両方の行事に携わることはなかった。現在この二つの行事は平行して進められている。

現在の船祭りの行事をみると、梅花の榎切りから始まり、稚児定め、多度大社参拝、宿入り、稽古始め、花つけ、大注連縄起し、船がらみ、柳切り、諸冊二尊飾り、稽古上げ、みそぎ、天王参り、宵祭、山起し、朝祭、山下し、多度大社お礼参りで終わる。船祭りは八月第一土曜日の巻藁船の出る宵祭、翌日曜日の車楽船の出る朝祭の行事・神事が中心となる。須成祭ではこの華麗な朝祭を大祭として位置づけている。かつて船祭りは旧暦の六月の暑い時期におこなわれていた。「夏六」とか「夏六を絶やすな」と言われたのは、この船祭りを指していた。

神葭の神事を見ると、真菰刈りから始まり、ちまき餅の縄綯い、葭刈準備、葭刈、葭揃え、神葭流し、棚上り、中湯立て、オミヨシサマ（御神葭様）参り、子供獅子・神楽の奉納、棚下しで終わる。真菰刈りから葭刈までは、ご神体である御神葭様を作る材料である葭を調達するための行事である。須成祭ではこの葭刈を神事としてとらえている。葭刈場は幾度か変遷があったが、蟹江川や日光川下流地域にあり、褌に白衣を着用した若衆がちまきを人々に投げながら葭刈り場へ赴き、葭刈神事をして葭を刈り取るのである。現在では村方三役、祭三役が刈り取りの手伝いをしているが、かつては若衆のみがおこなう作業であった。

神葭の行事・神事は蟹江川に神葭を流す神葭流しの神事、流れ着いたところで祀る棚上りの神事が中心になる。葭揃えで、ご神体となる神葭を葭で作り、神社の祭文殿に安置するが、他に宵祭の日に宮司が作る「真のご神体」といわれる御幣がある。この御幣は、宵祭の日から一年間、冨吉建速神社本殿に祀られる。それまでの一年間本殿に祀られていた御幣は、同じく宵祭の日に祭文殿の神葭の中央に立てられ、神葭流しでは井桁に組んだ神葭の中央に刺し立てて、蟹江川へ流されるのである。

棚上りの日から棚下しの前日までの毎晩、割（村組）を順番に須成区の人々が御神葭様参りをする。その期間は七五日間だといわれているが、現在、行事が土・日曜日に設定されているため七〇日間となっている。

百日祭りと須成祭の活動

須成祭は、宵祭・朝祭を起点に行事日程が決まる。かつては陰暦の六月十七日が宵祭、翌十八日が朝祭であったが、現在では、新暦の土、日曜日中心に祭り行事を設定し、八月第一土曜日が宵祭、その翌日の日曜日が朝祭となっている。

現在、朝祭・宵祭を起点に日程が決まっている祭り行事は表（Ⅳ―1）のとおりである。稚児定めは宵祭の三週間前であり、朝祭の二二日前にあたる。棚下しは、朝祭の一一週間後であり、朝祭の七七日後にあたり、稚児定めから棚

第一節　稚児と笛吹

須成祭の囃子は、須成祭囃子あるいは単に祭囃子といわれるもので一曲である。この囃子は、化粧し美しい衣装に身を包んだ稚児六名の中で一番小さい一稚児・二稚児を除く、一なす・二なすの二名・太鼓一名・楽一名の計四名が演奏する車楽囃子であることが大きな特色である。笛吹は笛の吹ける大人あるいは青年から二～四名が頼まれ、その役にあたっている。笛は個人の所有であるが、それ以外の楽器は敬神会の衣装係が管理している。

一なす・二なすは、なぜなすといわれるのかは不明であるが、現在須成地区に住む人の親族で五、六才（時に八才位まで）の子どもを選ぶ。

楽器は「オオド」といわれ、能などで使われる大鼓であるが、奏法が能と異なっている。一なす・二なすと呼ばれる稚児二名の前に、大鼓の皮の面を上にして床に置き、竹を細く割ったブチ一本で打つ。これまでまったくこの楽器を触ったことのない子どもたちであるが、宿入りから稽古を始め、当日にはほぼ一人で打てるようになる。稽古上げから、本番用のブチを使用する。これは、長さ四五センチメートルほど、上の幅一・四センチメートル、下の幅一・二センチメートルの細く割った竹に、金銀のテープを巻いたものである。

太鼓は小学校三、四年生（五年生の時もある）から一名選ぶ。現在鼓笛保存会顧問が指導に行っている須西小学校郷土芸能部（通称「芸能クラブ」）の四年の部員から選び頼んでいる。つまり、須成祭のある須成地区の子どもだけから選ぶのでなく、学区内の郷土芸能部（時に鼓笛保存会会員）の子どもで、須成祭に理解のある家庭に頼みに行くのである。

楽器は、締太鼓で、「小太鼓」ともいい、バチ二本で打つ。稽古上げから本番用のバチを使用する。これは、長さ四五センチメートルで直径二・八センチメートル、金銀のテープを巻き、先の丸い部分は赤布で巻き、手元の端に紅白の一二・五センチメートルの房がついているものである。

楽は小学校五、六年生から一名選ぶ。現在「楽」も太鼓と同様、須西小学校郷土芸能部（時に鼓笛保存会会員）の部員から選んで頼んでいる。

楽器は、胴長鋲打太鼓で、練習などでは「大太鼓」という。練習では普通の太鼓を用い、先が丸くなっていないバチ二本で打つ。本番では革の部分が直径五〇センチメートル、胴の長さ五四センチメートルの黒塗りの太鼓を使う。他の楽器と同様、稽古上げから、本番用のバチを使用する。本番用のバチは、太鼓のものと同じである。太鼓も稽古上げから本番用のものを使用する。

楽の大太鼓は、三重県桑名市高砂町の太鼓店で皮の張り替えなどをおこなっている。平成十五年にこの本番用の黒塗りの太鼓を、太鼓店で補修した際、内側に銘が発見された。享保二十一年（一七三六）七月吉日と天保二卯（一八三一）六月下旬とあり、古くから修繕しながら使われていたことがわかっている。

なお、平成二十年は、郷土芸能部に対象となる男子児童がいなかったため、太鼓は須西小学校の五年、楽は六年の男子児童の中から希望者を募った。

笛吹は、鼓笛保存会の伝承育成指導員あるいは師範（師範代）などの大人と、中学生以上の男性から二、三名が頼まれ、その役に当たっている。

使用する笛は、七つ孔の笛で、昔からの古い笛を使う場合と、新規購入する場合がある。購入する場合は、名古屋市熱田区の熱田神宮西門前にある「菊田雅楽器店」で間尺といわれている笛を購入する。店主の菊田氏によると間尺と

第一節　須成祭の衣装

（一）須成祭の役者の衣装の概要

須成祭では、行事によって祭り役が身につける衣装が異なる。宿入り、祭囃子の稽古、葭刈、祭当日の衣装は表Ⅵ―1のとおりである。

冨吉建速神社・八剱社（須成神社）には、昭和十三年（一九三八）に描かれた「須成祭之図」があるが、ここに描かれている衣装と現在の衣装とを比べてみると少々違いがある。現在は緋色の稚児衣装の上に一稚児・二稚児が緑の狩衣、一なす・二なすが紫の狩衣と袴、太鼓がクリーム色の狩衣と袴、楽はクリーム色の裃をつけているが、昭和十三年の図では、一稚児・二稚児も袴を着けており、他の役者の狩衣や袴の色・形にも違いがみられる。門屋敷の後藤家には、かつての稚児の狩衣と袴が保管されている。年代が不明でありどの役のものかは特定できないが、この衣装をみると、現在の狩衣の形は、かつてのものと違ってきていることが分かる。また、袴についても、文書や写真などには、かつて稚児が裾のすぼまった差貫袴を着用していたことが記録されているものもある。須成神社の社務所に掲げられている昔の祭りの記念写真などを見ても、役者衆の狩衣や袴は年代によって現在と違う部分があり、若干変化してきている。また、平成十一年から十六年にかけて役者衆のお供の衣装が浴衣から法被姿に変わった時期もあった。しかし、現在は浴衣姿に戻っている。ただ、細かい部分に変化は見られるものの、大部分はかつての姿と大きな違いはない。

写真Ⅵ-1　稚児衣装の下襦袢
（昭和11年　後藤家所蔵）

須成祭で稚児が身にまとう稚児衣装は、緋色の縮緬地の振袖で、袖に金糸などを使った刺繍の柄が施されているものである。この衣装は須成祭のために仕立てられたものである。稚児たちは顔と手に白塗りの化粧をして衣装を着る。稚児衣装の下着は、袖の中に取り外しができる白の縮緬地の袖を付け、中には専用の下襦袢を着る。下襦袢は白の木綿地で、袖の部分には肌に貼りつかないような素材が使われ、袖口がすぼまっているもので、古くから同じようなものを着用している。また、稚児やなすの腹掛けも古くから同様のものを着用している。

葭刈の白衣は須成祭の神葭の神事の衣装として仕立てられるものである。白襦袢、葭刈襦袢とも言い、晒地で仕立てられ、背中上部の縫い目が開けてある。これは川に入った時に空気が抜けるように仕立ててあるのだという。白衣の下には六尺褌をつけ、肩には襷掛けをする。この衣装は、葭刈のほか、神葭流し、棚上り、中湯立て、棚下しなどの神葭神事の時に着用する。

宿入りの時の役者衆の親役・祭三役の衣装は本来、表のとおり、紋無しの黒羽織を着用することになっていた。現在は、着物や羽織を持っている人が少ないため神社所有の衣装を貸し出すので、神社の紋が入っているものを着用している。また、祭三役は本来、羽織の下に着物を着用するのだが、最近は身長が高い人が多く、貸し出しの衣装では短いので（祭りの時は袴を履くので短くても良い）、半襦袢の上に若衆用の浴衣を着ることで臨機応変に対応しているという。

はじめに

須成祭は、八月第一土・日曜日を中心に愛知県海部郡蟹江町須成で繰り広げられる祭礼である。これは車楽と呼ばれる山車の祭船が登場することで知られている。しかし、祀った神葭を祭事後に放流し漂着した場所で再び祀る行事を含め、これらの準備期間と合わせると一〇〇日余りを費やすため、須成祭は別名、百日祭りと称される。

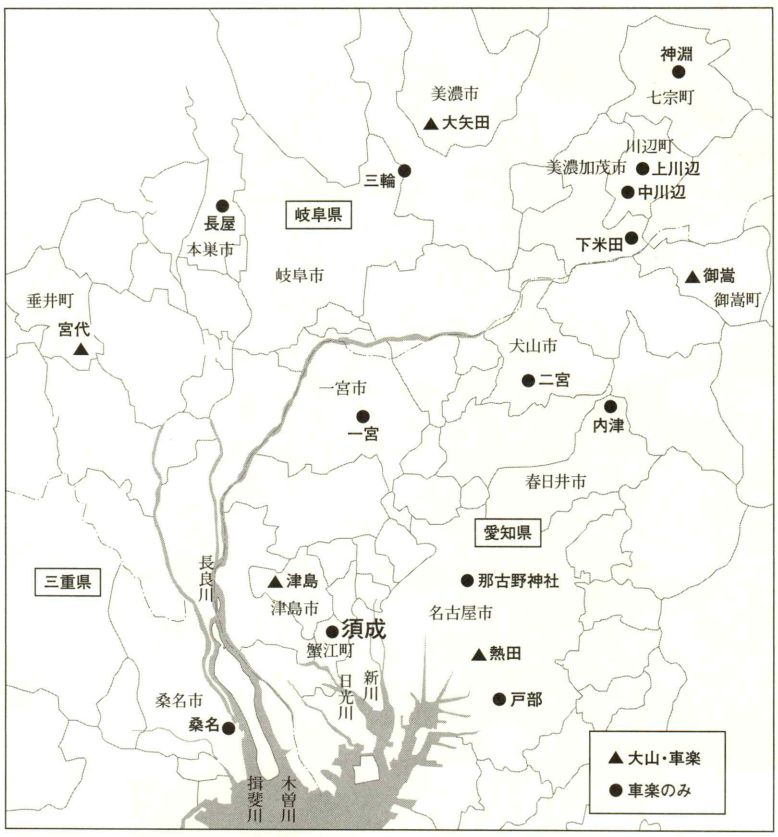
車楽は中世からの伝統を有する山車である。そのため車楽行事のなかには古い祭礼の内容を伝えるものもある。また、神葭に係わる一連の行事には、低湿地帯で生活する人々の信仰と年中行事の姿が良く現されている。本稿では須成祭を巡る特色ある祭礼文化を探ることにしたい。

第一節　濃尾平野の大山と車楽

大山と車楽

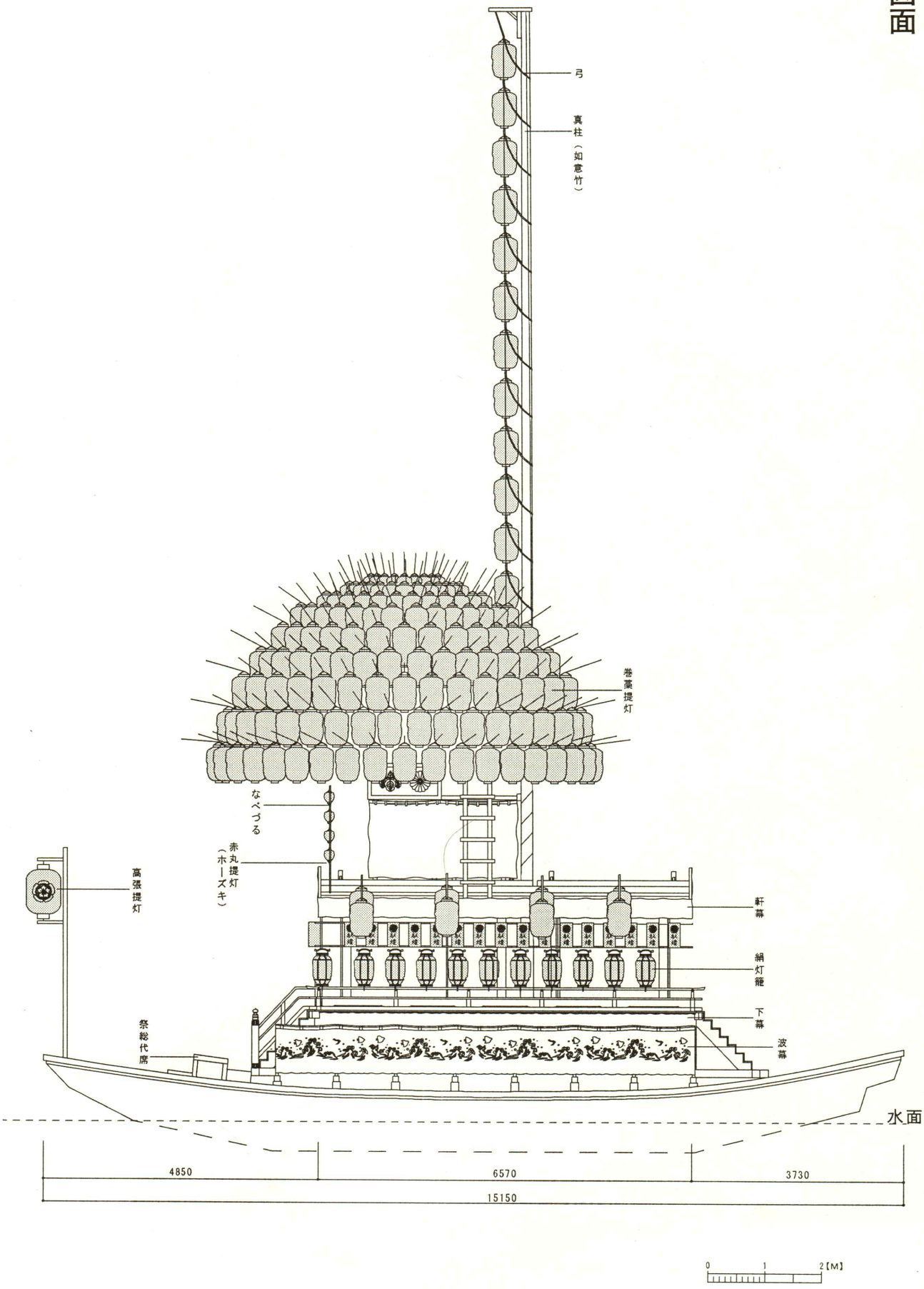
須成祭で地域の人々が楽しみにしているのは、試楽と朝祭に姿を替えて登場する車楽である。これは濃尾平野各地に分布する山車形態の一つで、車輪だけでなく船で移動するものも存在した。この地方では、江戸時代に発達したからくり人形を主役とする山車が多く見られるが、中世から濃尾平野の祭礼に登場していた山車が車楽である。それは壇尻または台尻とも表記され、さらに御車と呼ぶ所もある。これらは素朴な形態をした祭車であり、民俗色の濃い行事を残している所も多い。この車楽は、大山と対で出す組み合わせを正式としたが、須成祭のように車楽だけ単独で祭礼を展開させた所もある。これら大山と車楽の登場する祭礼の代表が、津島や熱田で繰り広げられた天王祭であった。

愛知県西部の津島市に鎮座する津島神社は、江戸時代まで「津島牛頭天王社」と呼ばれ、京都の祇園社（八坂神社）と共に、疫病退散を祈る中心的な役割をはたした社である。ここの祭礼は津島天王祭りと称され、旧暦六月十四・十五日におこなわれていたが、昭和三十八年（一九六三）から七月第四土・日曜に



図Ⅶ-1　濃尾平野における大山・車楽の分布（消滅を含む）

祭船図面



巻藁船　側面　立面図